江湖新聞　第十九號

定價八分

西垣文庫
文庫10
7287
19

特 文庫10
7287
19

帝国図書館蔵書

江湖新聞第十九号　　慶應四年戊辰五月十三日

○甲州より之来状

此件既に十六号に其大略を出せり今細報を得しより茲に記す

先月十九日脱走方頭林昌之助人見勝太郎伊庭八郎等
之人数小隊の兵二百八十人を引ひ
東照大権現之市場日ノ九の日繰数にあり立甲州原駅
村に入五六人早速より府中に到り此後上京いたし委問之
事件有之に付間もなく様下一通之義お報ひまつり入り申
候様代官より廿八日迄延引仕中迄尾藩を外へ加勢を

帝国文庫

黄ばみを夜沼津藩二百人程掛川藩百人程中津藩四十
人程石禾川鶴田村迄出張致尾張田宮如雲と人
数百人を領藩中根帯刀二百人程岩村田と藩小林貞蔵
六十人引率し人廿六日甲府着し城中東松代藩分も
出兵アリ家老と人数教来石辺迄出張同
石田を迄送り同安藤信正領分沼津藩へ領ヶ所成
引渡せ〜愛左右と道筋より外と脱士四百人押来り
最前と兵と和合〜押寄ると見ぶ程構和い〜一同沼
津と方へ引払ひ城右迄留中ハ二郎河代表為替出し鉄
旅費ホも和藩と中と承及ひ且右脱走士甲府へ入ル

苦い出民宛も故田舎親族の帰り来るを迎へ〜ことく懇切に扱
城用等の談有と言ハ行れも悲泣い〜快く出立堅外と出
黒駒宿と七ハ廿日一ケ月も逗留い〜居ハ一同名残を惜
神君の御旗を持ハ苦ハ愚民迄も下社い〜ハ執と乃ち

○

前文脱走兵の談長人見勝之亦園田谷吉ヶ官軍方参謀
海江田武次ハと文通写
以華仮物色付逐日暑寒お悟と切共倍御清適来繁〜拙も去
三月中御下向と御日坂弾ヶ為御備ハ〜歎預侍変格ハ
配を蒙り不後御入府と上預ハ〜程も畏ハ〜ハ所垂お来

難有事勢ゆゑ[illegible]遂報謝を[illegible]領海[illegible]
[illegible]徳遠近[illegible]同志[illegible]の群集東海道節に
[illegible]出[illegible]一応
朝廷に對し奉恐入候[illegible]人倫の道を傷ケ[illegible]
[illegible]措置天下
[illegible]不見国より論を[illegible]結義[illegible]
而業[illegible]立到り中[illegible]保宮軍に對し[illegible]不敬暴[illegible]不仕心情
[illegible]安遁[illegible]山国[illegible]
[illegible]十八日[illegible]十日[illegible]措置[illegible]
仕度[illegible]上書[illegible]
[illegible]保[illegible]一同[illegible]
[illegible]措置[illegible]
[illegible]

[illegible]上[illegible]俗令自擅[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

人見勝太郎
岡田斧吉

海江田武次郎
[illegible]

姫路侯之建白

謹而奉哀訴候今般主人□□恭順謹慎無二念之旨達
叡聞且祖先以来治世之遺勲をも 思召家名相続被仰出候次第
難有
叡慮之程奉感佩候同家忠懐義主家輔翼之道行届不申候
遂ニ徳川累代
朝廷恭敬之意も貫徹不仕次第ニ相運ヒ実ニ悲歎慟哭之至ニ奉存候
依之叢衆錯情為仕奉待 御厳罰候處觸ハ最為奉恐入
候得共広く言路を被為開候ニ付奉申上度 私家筋之義元来徳川家
臣僕にて主家奉蒙 御委任候より従る遁分之 誅戮

辱め候義ニ付天恩之莫大なるハ世々子孫不奉忘候得共
徳川家衰運之今日に至り累世之恩義も不顧主家ニ並
列比肩候様なる君父を睚眦する之筋ニ相当り御譴責も
可奉蒙候所令寛宥之
聖意を以て御赦ハ免れ候共又臣子之上ニおゐて雖恐事不
済候殊ニ封疆之御制度之所詮上ハ各藩陪臣之ものに至迄
之通ニて有之奉存候間私共家筋なる者徳川家之随従仕奉報
御国恩度志願ニ候又領地之儀を忠懐奉蒙り天譴因ッ出發
御変革之折柄ニ付 召上ハ義を当然之所本ニ御遺
憾無之候間何卒前件申上ハ下愚之至願御憐察之上

御同御家中の物者那方此上者悉入り実情別て
皇恩を以是迄て不領て士民共ニ鐵砲を免れ難有仕合
世者の物

王政御一新世道御匡御て時て當り低物ゝ君臣て分義義
忘却一私利を當て以物ゝ利者歌
天朝儀を上て御失體を嘆し下ハ紙民て觀觀を生ず下民と
深痛心憂患て餘り者犯
天怒て罪不顧者死ニ已管者歌ニ弟恐縮恐惶謹言

酒井忠績

五月

○

閏月廿五日官軍方薩州藤重廣て人数小國方ハ
會津仙臺二て松福侯相會廣て人数戦爭て及ハ昨未
初め仙臺の兵白河堀を引拂ひ矢吹宿一陣しる変
廿五日曉七ツ時頃白坂宿ハ屯營の官軍不殘出陣し
て各河堀の渡口を廻り不意て寄て堀中へ向ケ大砲
打掛ハ変堀を以無る手配有之早速防戦ハ
被裂九を寄手ハ打迫て互て殺傷有之ハ変堀を放北て
姿と相隠て打掛矢吹宿て仙臺兵拂曉て白河て方て帰り
火の手和へ人馬契頻て和同ハて進軍て號令を下し

五ツ時頃白河へ弾薬を繰出し元六百人余直に行候を以て
戦争に相成探索為致密に下町より寄手の落口へ出て大砲為
三發打掛ケ申候内寄手に於て裏切を兵有之後ト疑念を
生し人数に有之六百人餘を入レ接戦と成る事云ふかを以
打て出寄手の前後に敵を受ケ遂に敗軍と成り戦死手負
負疵有之内死傷二百人余有之由